

古高取通信

No.19

平成27年 3月

古高取を伝える会会報

直方の高取焼



古高取

| | |
|-----------|---|
| 目次 | |
| 古高取の魅力伝える | 2 |
| 古高取紹介 | 3 |
| 古高取の広場 | 4 |
| 活動の記録 | 5 |
| なんでも掲示板 | 7 |

「高取焼に学ぶ」

昨年は、内ヶ磯開窯400年に「軍師官兵衛」の放映が重なり、高取焼にも灯のさす一年となりました。

さらに、今年の一二月には、子ども焼物教室等の地道な活動が評価され、読売新聞の筑豊賞を受賞しました。これを励みにさらに飛躍を望みたいものです。

高取焼は、宅間窯に始まり内ヶ磯窯、山田窯の古高取と呼ばれる時期を経て、白旗山窯で遠州七窯の一つにとして窯の評価が確立されました。

それを引っ張ってきたのは朝鮮陶工の高取八山で、その子孫が、今、小石原や西新で窯を開いています。

望郷の念に駆られながらも名品を焼き続けた八山に想いを馳せながら、異文化の交流で花開いた高取焼の歴史を、今年はずっくりとたどって見たいと思っています。

隅田知明

古高取の魅力伝える

古高取研究によせて

直方市教育委員会 田村 悟

歴史や考古学の研究に限らないことだが、あらゆる研究には「事実」の部分と、「解釈」の部分がある。「ある遺跡から石貼りの溝がみつかった、その中から七世紀の土器が出土した。」というのは、事実であるが、「その溝が、大型



現在の内ヶ磯窯跡(福智山ダム)

方墳の周溝と考えられる。」というの解釈である。しかし、新聞記事などでは、「七世紀の大型方墳発見」とう見出しが踊ることになる。「解釈」はあくまでも仮説であり、実証されたものではないことは、歴史を志すものは常に心に留めておかねばならないことである。

高取焼の歴史でいえば、慶長年間に「せともものや町」と呼ばれた京都三条の一角から、美濃、伊賀、備前、唐津などと共に、織部好みの高取が一定量出土したことは、事実とみてよからう。また、ここで、複数の「せとももの屋」が創業していたことは、洛中洛外図屏風などから事実と判断される。しかし、その実態を示す文書は皆無に近く、古田織部本人の関与も確認されているわけではない。近年、薩摩や上野において、織部本人の関与を示す書簡などが確認されていると聞くと、高取においては現在のところこうした史料はまったくみつからない。

筆者は数年前、土岐市美濃陶磁歴史館の招聘を受け、高取焼窯跡についての講演を行ったことがある。その際、驚いたのは、土岐市の学芸員考文化振興係長(当時)の加藤真司氏から、「高取では『筑



内ヶ磯窯跡(直方市文化財調査報告書 第五集より)

前国統風土記』のような同時代資料が残っていてよいですね。」と言われたことだった。当時、全国をリードした織部様式の製品を焼いた窯が多数存在する美濃地域においても、同時代の文献資料はほとんど残されていないのである。

その際、瀬戸六作や織部十作などの伝承、あるいは肥前で窯の構築を学んだという加藤景延についてうかがったところ、「そういうのは、物語の世界ですから。」と文献史学による研究の対象にはならない意味の返答をされた。

逆に考えると、高取においては、同時代資料であり、藩の公的記録でもある『筑前国統風土記』に、成立の由来、製作者、窯場の変遷、小堀遠州の関与などが細かく記されている意義はきわめて大きいといえよう。昨今、内ヶ磯窯で製作された『織部好み』の茶陶製作者についてさまざまな推測がなされているが、『筑前国統風土記』には、高取焼の中心人物が高取八蔵であることが、はっきりとかかれており、瀬戸・美濃の技法に通じ、唐津寺澤家に仕えていた五十嵐次左衛門が合流したことが述べられている。実際に、内ヶ磯窯跡においては、唐津と共通する鉄絵の陶片が多数出土しているし、瀬戸・美濃と共通する織部好みの沓茶碗や水指、花人、向付等が出土している。また、唐津に由来する階段状連房式の窯が内ヶ磯で導入されていることも、『筑前国統風土記』の記述と符合する。発掘調査が文献の記述をしっかりと裏付けているのである。『筑前国統風土記』は高取焼研究の基本史料として最も重要視すべき文献であり、この内容を否定するためには、この史料よりも価値が高く、歴史学会等で十分に認知された史料をもってなされなければならないが、現時点

では、そのような史料は皆無なのである。

戦国時代までの日本列島では、瀬戸・美濃地域を除いて本格的な施釉陶器を生産する技術がなかった。織豊時代、急速に武将の間で茶の湯が流行したことから、文禄・慶長の役の際、朝鮮半島に侵攻した戦国武将たちは、先進地である半島の陶工を連れ帰った。萩、上野、伊万里、薩摩など、主要な西国の窯場の陶祖は半島からの渡来人と伝えられる。半島から新たな技術が招来されたことで、西日本の陶磁器生産は大きく変容した。高取の歴史を考察する上で、このことを過小評価してはならない。



竹田文庫『筑前国続風土記』

この形態の窯は唐津で最初に開発され、十七世紀初頭には、隣接する上野釜ノ口窯や織部様式の茶陶を多数生産した美濃の元屋敷窯に採用されている。この形態の窯は、中国の明代に発達しており、やはり大陸から何らかのルートで肥前にもたらされたものと考えたい。

織豊時代の京都では、楽などの軟質施釉陶器が焼かれ、一定の技術を持った陶工集団が存在したことは事実である。しかし、彼らは渡来系の技術なしに、高い焼成温度で耐久性に優れた硬質の陶器を生産することはできなかった。デザインの上では瀬戸・美濃などに影響を与えたであろうが、渡来系技術でつくられた最新鋭の階段状連房式の窯の築造を主導するなどということはまずもって考えられないのである。

もちろん、上に述べたことは、筆者の「解釈」である。いずれにせよ、高取が、直方が生んだ世界に誇るべき文化であることは変わりないし、その「解釈」について、学問上のルールにもとづいた上で、さまざまな議論がなされ、真実の高取の姿が明らかになっていくことを願ってやまない。

古高取紹介

【内ヶ磯窯跡出土の茶入】

副島 邦弘

前号N.018で、十二室出土の肩衝茶入の説明を行った。今回はその続きである。

茶入れを焼いた場所の位置が焚口上の十三室と十二室の二室で床面で焼かれたことが輪状焼台と肩平焼台が並んだ状況で検出されたので、茶入はこの二種類の置台が茶入専用のもつと判明した。

これらは原位置でおさえることができ、四方距離の同種の置台の位置から、その室の面積等から換算すると四百個体以上の茶入が焼成されていたことが分かった。

十二室の茶入を焼く置台は百四十五個が残っていたことが実測図の記録で理解できる。このことは重要な検証例にあたる。

茶入の器形を分類すると筒形肩衝・胴丸肩衝・壺・瓢箪形等に分類されている。出土遺物から今回も説明しよう。

筒形肩衝茶入（右下）
色調は黒褐色を呈し、釉調は鉄



筒形肩衝茶入 口径 3.1cm 器高(残高) 7.8cm

釉である。最大径を胴中央部に有し、肩部に双耳をもち、橋状の貼付をもつ。頸部は低く、やや丸味をもつ。胴上部から中央にかけて幅二、五mmの縦位の凹線で、その後にはラ先沈線を施している。十二室の床面より出土していたものである。

胴丸肩衝（次頁、左上）

胴部下半から底部を欠損する。大きな口縁部と高い頸部を持つている。この頸部に貼花文が九ヶ所ある。胴部はヘラ先による無回転八本の波状文と回転直線を交互に



胴丸肩衝 口径 5.2cm 器高(残高) 4.7cm

配して文様とする。口縁と肩に別の肩衝茶入が融着している。色調は暗茶褐色で釉は鉄釉である。出土地点は焚口で、上の十三室から落ちたものと考えられるものである。

古高取の広場

中野等先生を迎えて

副島 邦弘

本年度の古高取研修講座のまとめとして、『黒田官兵衛と六端城（鷹取城を中心として）』と言うことで、九州大学中野等教授に講義をお願いした。

平成二十七年一月十一日(日)の十三時三十分から十五時三十分迄で、資料八枚を使いながらの講義の要約は以下の通りである。



まず、六端城の読みについて、端城（はじょう）では無く、端城（はじろ）と、その当時は読んでゐる。これは豊臣秀吉の手紙の中に、仮名で”はしろ”と出てくるので、”はじょう”では無く、はじろが正しい。

六端城とは、若松、黒崎、鷹取、益富、松尾、左右良を言う。この六端城の城主は万石以上のものが黒崎、鷹取、益富、左右良の四城である。この中で如水の家臣は黒崎（井上氏）・鷹取（母里氏）・左右良（栗山氏）が同列で、長政同列は益富（後藤氏）で、若松・松尾は二千石級の家臣達に分類される。この城主達は山下の里に屋敷をもち、福岡に一ヶ月行くと、任地に一ヶ月というように一年に六ヶ月が福岡へ、そして任地へ六ヶ月と交替となっていた。福岡藩祖は軍師官兵衛で秀吉の基にいた。竹中半兵衛も甲斐の山本勘介にも、軍師という名称は無かった。これには当時全国的な有名な学者であった貝原益軒によって『黒田家譜』の中で称されるようになって、これが広がったものである。軍師という名は使用していない。官兵衛には子供が二人いて、長男長政と、次男は熊之助で朝鮮の役の時に溺死している。



官兵衛と長政は、慶長の役の時には石田三成等軍目付衆と仲が悪かった。長政・蜂須賀氏の戦いぶりを秀吉に中傷していたため遠ざけられていたし、秀吉は文禄の役の時、朝鮮まで行くと言うことで名護屋城まで行っていたが、慶長の役に時には大阪にいただけで、戦いの情報は、軍目付衆からであったため中傷が入っていた。

黒田家は家を継承させるため、官兵衛も長政も早い時期に家督を譲られて二頭政治となっていた。外交交渉べたの黒田家では戦いでは攻めるのは得意だが友人づくりは下手であった。秀吉死後の派閥争いの中で、黒田家は徳川家康に

つきご奉公し、中間派の前田利家には加藤・福島・細川等が、石田三成を中心とする官僚派との争いとなったが、前田利家が死亡したため、中間派が家康派についた。この時官兵衛は伏見で情報を得るために茶の湯や連歌の会に出席し、ホットな情報を得た、関ヶ原の役の時は東軍家康側について、家康には長政が付き従い。九州は官兵衛が細川・加藤をもって戦い肥後水俣まで占領していった。細川は国東半島に領地を持っていた。これを家老の松井に守らせていたことでもあった。長政は父との手紙の全てを家康に見せていた。家康は官兵衛に九州での軍事行動を許可した。

黒田家は家を継承することを第一と考えていく。関ヶ原の戦は一日で終了した。全てが空手形となり、欲しくもなかった筑前国を長政に与えられた。この時、父は宗像郡を治めていたことが判明している。

黒田家は二頭政治を筑前国でも行っていた。すなわち、六端城についても、半分が父の老臣達で他は当代が守っていた。長政が上京した時は筑前守り父が、息子が筑前にいた時は父が上京していた。交替して家を守っていた。黒

田家の本分は”家を継ぐこと”であった。

これからの問題は、黒田家が幕府に提出した慶長の「国絵図」の中に、現在の鷹取城を高鳥居城と表記している。また文書にも鞍手郡高鳥居城という言葉が多く出てくるので今後に興味を引く。

この講義では事務局は”てんやわんや”であった。多数の参加者を得たため資料が不足のためであった。参加者に対してはお抹茶の接待を行ったことも、大盛況の要因ともなった。事務局はご苦労様でした。

活動の記録

●内ヶ磯窯開窯四百年記念

高取焼「内ヶ磯窯発掘出土品展」
〈平成二十六年十一月十五日(土)〜
二十三日(日)〉
場所…直方中央公民館一階大会議室
および二階郷土資料室

官兵衛プロジェクト関連の事業として、内ヶ磯窯開窯四百年記念高取焼「内ヶ磯窯発掘出土品展」は、おかげさまで無事終了致しました。



期間中、多くのお客様がご来場くださいました。本当にありがとうございました。

●子供焼物教室(お茶会)

今年も市内の各小学校でマイ茶碗のお茶会が始まりました。
子供たちのお茶碗のすばらしい出来映えにびっくりです。

お茶席での児童の表情は緊張でいっぱいですが、お菓子をいただき、抹茶を点て自服すると「おいしい」「にがいに」など言葉が飛びかき楽しいひとときになります。

ただお茶を頂くという行為も、きれいな姿勢で行えば気持ちのいいもの、美しい立ち居振る舞いは本人はもちろん周囲の方にとっても心地よいものです。

マイ茶碗造りとお茶会を通して日本の伝統文化に触れ「一期一会」「おもてなしの心」「美に対する感性」を養い体験できると思います。

茶道の祖、利休の茶の湯の心得の中に「稽古とは一より習ひ十を知り十よりかへるものその一」とあります。今年も一年、茶道のお稽古を積み、また、子供たちといつしよにお茶会出来るように頑張ろうと思います。

田中紀子



●学習部会

〈平成二十七年一月十一日(日)〉
時間：十三時三十分〜
場所：直方中央公民館

本年度の古高取研修講座のま
めは、『黒田官兵衛と六端城〜鷹
取城を中心として〜』と言う内容
で、九州大学教授中野等氏に講義
をお願いしました。

多数のご参加ありがとうございました。
講義の要約は前述の通り
です。

副島邦弘

【福岡散策】のお知らせ

日時：平成二十七年三月二十九日(日)
十時三十分(出発)

集合：地下鉄 大濠公園駅

美術館方面の出口

コース：福岡城〜光雲神社〜

崇福寺等

●グリーンコープ筑豊東地区委員
焼物教室(地域対象の焼物教室)

〈平成二十七年一月二十三日(金)〉
場所：デイサービスセンター直方
参加者：十名

若いお母さんの集まりで、初体



験がほとんどでした。

しかし、若い感覚で斬新なデザ
インの皿やお茶碗が出来上がって
ました。

●厚生保護女性会焼物教室
(地域対象の焼物教室)

〈平成二十七年二月十七日(火)〉
場所：直方市中央公民館二階
参加者：十六名

今回で二回目でしたが、高取焼
の歴史をしっかりと学び、制作に取
り組んで、りっぱな高取焼が出来
てました。

●鞍手幼稚園焼物教室
(地域対象の焼物教室)

〈平成二十七年二月二十七日(金)〉
場所：鞍手幼稚園
参加者：五十二名

今年で二回目となるお茶会で、
園児たちは楽しそうでした。

おかわりする子もいて、毎年続
けて行きたいと先生も喜ばれてま
した。

永富セツ子



●直方の江戸時代展
(ゆたらくと直方節句まつり協賛)

〈平成二十七年二月二十八日(土)〉
三月五日(木)〜
場所：古町もち吉ビル一階

「直方の江戸時代展」と言うこと
で、筑前城郭研究会所蔵の鷹取城
(直方市)や福岡城(福岡市)の一部
分の模型・資料展示と共に古高取
の発掘陶片や資料展示を中心に、
呈茶と陶芸体験も行いました。

とても寒い六日間でしたが、商
店街内での開催とあって、古高取
のことを知らないお客様にもご覧
頂きました。

石光秀行



なんでも掲示板

●あすの筑豊を考える三十人委員会
(読売新聞西部本社提唱)
 第二十八回筑豊賞受賞

〈平成二十七年二月八日(日)〉
 場所：中小企業大学校直方校

日々の活動内容が評価された事、大変うれしくまた誇りに思っています。表彰式に出席し田川地区、嘉飯地区の受賞団体の活動内容も聞くことができ、どの団体も「我がまちの思う情熱ここにあり」を痛感しました。



これからも土、炎、釉薬そしてこころをとおして、古高取の魅力や知識を伝え、情報発信の拠点となる資料館設立を目指して活動を深めていくエネルギーが沸き立った受賞でした。

柴田ムツ子

なお今年度、直鞍地域の筑豊賞候補にノミネートされた個人・団体は左記の通りです。

- 金剛山もとり保全協議会
- 田中玲子さん
- 藤田靖史さん、阿部広造さん
- 図書館ボランティア「土曜シアター」
- 古高取を伝える会
- 渡辺栄子さん
- 谷田康久さん
- 筑前城郭研究会

●金剛山もとり協議会だより
 〈平成二十六年八月〉
 平成二十七年三月
 場所：金剛山もとり広場

上頓野のもとり広場では年々体験イベントが増えて平成二十六年度盛りだくさんでした。主なイベントは次の通りです。

●八月二十日(木)
 ちよつくらふれ旅(夏)

古高取を伝える会の陶芸体験とソーメン流し大盛況。

●十一月三十日(月)
 作品展

お茶碗引き渡しまで広場に展示。同日、しいたけホダ木切り出し体験。

●十二月十三日(日)

高取焼内ヶ磯窯開窯四百年記念
 小学生野焼き体験(教育委員会)

市内十一校五年生五百七十名が一同に集まり野焼き体験。



数日前からお天気ばかりが気になり祈るような気持ちで当日を迎えました。朝から小雪が舞う中でしたが、お天気もち直し子供たちも大人たちも二度と体験できないであろう校外学習。忘れる事の出来ない一日になりました。

「古高取を伝える会」の方や多くの皆様にお手伝いをして頂きました。ありがとうございます。

●二月二十一日(土)
 椎茸菌植え付け

十一月に切ったホダ木に椎茸菌を植え付けました。真冬には珍しく気温も上がり最高のコンディションの中、皆さん楽しまれたようです。お昼は芋煮などで大満足。菌を打ったクヌ木は持ち帰りでした。

●三月十四日(土)
 植樹祭

数年後には梅、あじさい、もみじ、桜と楽しく遊べる里山になり、市民の皆様の憩いの里山になるでしょう。

末松登志子

高取焼「内ヶ磯窯発掘出土品展」の陶芸体験に参加したお客様からお手紙を頂きました。

そこで、とても私に良くしてくださいました皆様は、1つお願い事がござります。私のような体験をぜひ、福岡県立大学茶道部の部員にもしてもらいたい、と思っているのですが、皆様にご協力もいただけないでしょうか。ご検討いただけますと、幸いです。よろしくお願いいたします。

それでは、お忙しいところ、お手紙で失礼いたしました。春近しとはいえ、余寒身にしまり季節です。ご自愛ください。

福岡県立大学茶道部
田中 玲衣

部員からは、いいね、いいねという声も聞かれ、「私もお茶碗を作りたい!」と、目をキラキラさせておりました。いびつではありますが、自分で形づくった

茶碗をいただいたお茶は、いつも以上に美味しく感じられました。

古高取を伝える会の皆様のおかげで、私は素晴らしい思い出、宝物ができました。本当にありがとうございました。

立春とは名ばかりの寒さですが、ますますご健勝のこととお喜申し上げます。

お正月には、お菓子をいただきましてありがとうございました。皆様は、お元虎にお過ごしでしょうか。

さて、昨年11月の古高取焼の展示会・茶碗づくり体験では、大変お世話になりました。出来上がったお茶碗を手にした時は、嬉しさがこみ上げ、初めて自分で作った作品にばかり感謝いたしました。早速、茶道部のお稽古時に持参して行きましよう。

【訃報】のお知らせ

向野敏昭様

二月十日(火)、直方市長の向野敏昭さんが急逝されました。

謹んでお悔やみ申し上げます。思い返してみますと、市長に就任されてほどなく、平成十八年に「高取焼開窯四百年祭」の実行委員長を務められ、平成二十六年秋には内ヶ磯窯開窯四百年記念「五千人茶会」が開催されました。また平成二十年「古高取を伝える会」が発足した当時の挨拶の中で次のようなお言葉を頂きました。

”四百年祭の成功の力を集結して、直方の宝の高取焼を継承していく努力を近隣の地域と共に大きな力で広めていく、文化遺産を掘り起こし研究し地域発展の素材にしていくように願ひ、大きな一つの事例として成長していくことを念じています“

一会員として、いつも会のことを気にかけて支えてくださいました。十二月十三日(日)、上頓野の里山で五年生の「野焼き体験」にも姿を見せてくださいました。四月に市長を退任された後には、会の活動に参加して頂いたり、陶芸を満したり、里山でのんびり自然を満



喫して過ごして頂けるものと信じていました。悲しくて残念でなりません。ずっと私達の活動を見ていてください。ご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

「古高取」の魅力を発信するためのイベント情報など募集しています。掲載可能な情報などございましたら、事務局までご連絡ください。

〈編集後記〉

今年度の事業の多くが終了しました。会報も盛りだくさんで、お送り頂いた原稿も全てを掲載出来ませんでした。大変、申し訳ございません。

お送り頂いた原稿は、次号以降での掲載を検討させて頂くほか、内容によってはホームページ等でも紹介させて頂きます。何卒、ご了承くださいますようお願い致します。

今後ともご協力くださいますよう宜しくお願い致します。

「古高取通信」会報・NO19

〈発行〉

古高取を伝える会

〈発行日〉

平成二十七年三月二十日

〈現在の会員数〉

正会員 五十四名(五十四日)
賛助会員 十八名(二十七日)
団体 一団体(二日)

〈マイ茶碗の数〉

五千二百七十一個

〈事務局〉

〒八二二一〇〇二六
福岡県直方市津田町七十四
TEL〇九四九(三三)一三二一